第1部その2

「自己カテゴリー化」とその心理的過程

中村陽吉

A 「自己カテゴリー」決定の過程

周知のように、「自己カテゴリー化 (self-categorization)」という概念は、Tajfel, H. ed. (1982) における「社会的同定 (social identity)」理論をさらに展開して、Turner, J.C. (1982, 1987 など) が、特定の社会や集団に個人が自らを心理・社会的に同定し、帰属させることで自己意識を弱め、その社会や集団の一員としての意識を高めていく過程を理論化し、これを「自己カテゴリー化」と呼んだことに始まる。

Turner の主要な関心は、自己カテゴリー化現象の結果としての集団内での個人の変化や、集団内の対人関係、集団自体の特徴などにあったようである。もちろん、カテゴリー化の成立要件についても、類似性によるカテゴリーの把握や、カテゴリーへ自己を収納する際の手がかりなどについても分析を加えているが、上述したように、「自己カテゴリー化」の主題は、個人がカテゴリー内に埋没していく過程やその影響の検討であって、われわれがどのようにして自らを埋没させるべきカテゴリーを模索し、決定し、安定させていくのかについては十分ではないように思われる。

「自己カテゴリー化」についてのこのような傾向を、中村陽吉 (2002) では、「集団内自己カテゴリー化」と「自己内自己カテゴリー化」に分けて、「集団内」の問題をよりよく理解するためには、先ずもって、「自己内」における「カテゴリー化」過程を追及することが必要ではないかと述べている。そして、「自己内自己カテゴリー化」の過程を5段階に分けることを試みているが、いささか冗長で煩雑であり、再検討の余地があるので、具体的な心理的過程も含めて実証的研究を行いやすい形での理論化が必要ではないかと考えた。以下では、従って、専ら「自己内自己カテゴリー化」について論を進めていきたいが、表示は「自己カ

テゴリー化」としておく。

B 「自己カテゴリー化」とは？

「自己カテゴリー化」という表現には二つの主要な概念が含まれている。その一つは「自己（self）」であり、もう一つは「カテゴリー化（categorization）」である。

そして、ここでは、「自己」とは「“私（I）”が自らの“人格（personality）”に対して形成する“態度（attitude）”である」として捉えている。

また、「カテゴリー化」とは「特定の対象を特定の基準の下に“分類して（classify）”、幾つかの“カテゴリー”群へと“構造化し（structurize）”、そのいずれかのカテゴリーに、特定の基準の下に判断して、当面の主題を収めること、換言すれば“同定する（idenntify）”あるいは“帰属させる（attribute）”ことである」と考えた。

したがって、ここで言う「自己カテゴリー化」とは、上述の「カテゴリー化」概念の定義における「当面の主題」に「自己」を当てはめる場合のことである。

—a「自己カテゴリー化」実現の前段階

自己カテゴリー化を実現させる場合に、まずもって必要なことは、その前段階において、当面のカテゴリーを包含する上位次元の性質やそれとその環境状況との関係などに多かれ少なかれ情報が取得されており、また、自己の現状も、自己の現状とカテゴリーの置かれている状況との関係も整理されていることが必要であろう。もちろん、これらは、カテゴリー化実現に際して意図的に行われるとは限らない。むしろ、従来の生活経験の中で、かなりの部分が形成されており、カテゴリー化自体はほとんど直感的にヒューリスティックに処理されていることのほうが実際なのであろう。

—b「自己カテゴリー化」過程の4位相

「自己カテゴリー化」実現までの過程は上記前段階の諸相を踏まえて、まず、自己を収納可能なカテゴリーを収集し、構造化する段階を経て、次に自己を収納すべきカテゴリーを選択し、決定する。しかし、問題はそこで安定的に決着するわけではない。外圧や種々の状況変化に伴い、自らが決定したカテゴリーに自らを帰属させていることへの心理的不安や社会的葛藤を体験したり、そのような事態に陥る危険を察知することも無いとはいえない。そこから、自己防衛や自己改

善の動きが生じ、それらを経て、「自己カテゴリー」は自己にも他者にも明瞭に認知されるに至るのであろう。したがって、「自己カテゴリー化」過程は、第1位相としては、自己を収納する可能性のある幾つかのカテゴリーを収集・構造化する位相であり、第2位相は自己を収納すべきカテゴリーを選択決定する位相であり、第3位相は自己を収納すべく選択決定されたカテゴリーを再吟味して、確立し、外圧に対して防衛するか、あるいは、必要に応じて修正したり、外部との関係維持を重視して改変したりする位相である。要するに、決定後の位相なのであるが、しかし、この第3位相には自己防衛的反応と自己改善的反応が含まれており、この両反応における心理的過程には相反する面があるので、前者を第3位相とし、後者を第4位相として、「自己カテゴリー化」過程を4位相に分けてみた。

(a) 自己収納の可能性があるカテゴリー収集・構造化の位相

イ 所属集団・友人や職業の選択・趣味や嗜好の決定・自己概念の特徴など、自己をカテゴリー化すべき対象の次元を決める。

ロ 対象次元を分類し、構造化すべき視点（たとえば、価値・必要度など）を定め、さらに、比較検討の対象とすべきカテゴリー群設定の基準（カテゴリーの数・規模など）を決める。

ハ 対象次元を上記視点・基準に従って可能な限りのカテゴリー群に分類する。

ニ 上記カテゴリー群から、自己収納の可能性のあるカテゴリーを出来るだけ多く抽出する。

(b) 自己を収納すべきカテゴリーの選択・決定の位相

イ 上記のように抽出された複数のカテゴリー間の異同・利害などの比較検討を行う。

ロ 抽出された複数のカテゴリーのそれぞれの特性と自己の特性との関係の検討を行う。

ハ 選択決定を行う際の状況的手がかり（所属集団の有無や性質・他者の存否や熟知度など）を検討する。

ニ 関わりのある他者が選択しているカテゴリーを、自己が選択したいカテゴリーとの異同・長短・関係性などから検討する。

ホ 上記他者と自己との心理・社会的関係の粗密も配慮する。

ヘ 上記諸点において、検討・推論の過程に短慮・見落とし・バイアスなどの過誤が無いか検討する。

(c) 自己を収納すべく選択・決定されたカテゴリーの確立・防衛の位相

イ　自己カテゴリー決定後に以下のような状況が発生すると、心理的には不協和が生じるし、社会的には葛藤が強まる危険があるので、その対処法として、外部からの情報を無視・歪曲したり、自己の正当性を強化する努力を行うであろう。

ロ　上記不協和・葛藤などの高まりの近因・遠因としては、少なくとも以下のような状況が思い浮ぶ。

@　関係ある他者・所属集団・社会・文化などにおける規範や伝統との不整合を認知する

@　外部からの低・悪評価の存在を認知し、しかも、その評価源と自己との社会・心理的関係の密度が濃いことを否定できない。

@　決定後に、選択過程や決定状況内での過誤・失敗・損失などが露出したり・露出の危険の高まりを察知する。

@　上記諸条件との関係で生じた心理的安定の崩壊（認知的混乱・感情的過激化・動機的葛藤など）を感じる。

@　自己を正当化し、葛藤・不協和の原因の所在を外的条件に求めやすい個人的特性

(d)　自己を収納させたカテゴリーの修正・改変の位相

イ　自己カテゴリー決定後に上記と同様な心理・社会的不安定・葛藤などが生じた場合に、上記のような自己防衛的言動ではなくて、むしろ自己改善的に自己カテゴリーを修正したり改変させたりすることも多い。

ロ　自己防衛よりも自己改善的方向への言動を誘発する社会的状況や個人の心理的状態としては、以下のようなことが考えられるであろう。

@　葛藤回避的社会・文化規範の存在を肯定的に認知する。

@　外部からの情報・働きかけを前向きに受け入れ、利点を強調する。

@　社会（関係他者や所属集団など）との葛藤（排斥・誹謗・闘争など）による不安・自尊感情の低下などを回避する。

@　自己内の葛藤（自己概念の分裂や崩壊・現実自己と理想自己との葛藤など）を回避する。

@　自己防衛的言動を批判し、自己改善的言動の価値を肯定しやすい個人特性

—c 「自己カテゴリー化4位相」と「自己過程の4位相」

「自己カテゴリー化」は、前述のように、基本的には特定対象次元内の特定の

カテゴリーに自己内の特定のカテゴリーを収納する（換言すれば、帰属させる、同定する）ことであるとすれば、それは同時に自己と特定対象次元との関係の明瞭化であり、その時点での「自己カテゴリー」の明瞭化である。要するに、「自己カテゴリー化」の基本的過程は「自己」自体の「帰属・同定」の過程であり、「明瞭化」の過程でもある。そして、これらの現象的過程は、その中心が「自己」なのであるから、中村陽吉（1990）が提唱している「自己過程の4位相」とも密接に関わっているものと考える。

(a)「自己過程（self-processes）」

上述の中村陽吉では、「ここでいう自己過程は、パーソナリティの中核としての自我（ego）の成長や作用の心理的過程とイコールのものではなく、また、自己の問題を固定的な客体として出来上がった構造としてみるのでもなくて、社会的文脈のなかで構造化していく現象的過程として把握しようとするもの」と表現している。そして、その具体的過程として4種の位相の存在を想定している。

(b)「自己過程の4位相」

具体的な過程の第1位相としては、われわれは自分が自分に注目し（自己注目 self-focus）、自分を意識化する（自己意識 self-consciousness）現象を捉えている。これは、「自己カテゴリー化」過程の前段階において、その過程の出発点として必要な現象であろう。

第2位相としては、自分が自分の生理的・心理的・社会的状態や特徴を認知し（自己認知 self-cognition）、それらを自分なりに理解して自らの特徴を把握する（自己像 self-image・自己概念 self-concept）現象を捉えている。「自己カテゴリー化」過程との関連でいえば、主としてその第1位相のカテゴリー収集過程と同様に、自己やカテゴリーにかかわる情報収集・構造化などの、いわゆる「情報処理過程」としての特徴が主題となっている。それと同時に、自己像や自己概念の形成はまさに自己を収納すべきカテゴリーの決定過程でもあるので、いわば「意思決定過程」であり、「自己カテゴリー化」における第2位相の選択・決定の過程と密接にかかわっているであろう。

第3位相としては、把握された自己の特徴を、自らが設定している望ましい水準や基準となりうる他者の特徴などとの比較を下に評価し（自己評価 self-evaluation）、その評価結果に肯定的・否定的感情を抱き（自尊感情 self-esteem）、少しでも肯定的感情を維持し、その低下へは抵抗をするであろう傾向の存在を描いている。「自己カテゴリー化」との関連としては、そこでの第3位相である「自己防衛」的傾向とは基本的心理過程において合い通じる面を

認めうるであろう。

第4位相としては、社会的場面における自己表明的行動面に目を転じ、自己についてその過去や現在の状態とか未来への予想願望などを率直に他者や社会に向けて語る（自己開示 self-disclosure）傾向や、自尊感情の保持との関連で自己を修飾したり防衛したりする形での自己表明（自己呈示 self-presentation）の傾向に注目している。この種の傾向は「自己カテゴリー化」における自己防衛のみならず第4位相の自己改変などの表現と深く関わっているのであろう。

(c) 「自己過程」の4位相の特徴

これは、基本的には、自己が自己として機能するに至る心理的過程の現象的経過過程を時系列的に4側面に分類したものであると同時に、心理的機能面では第1・第2位相は認知的側面、第3位相は感情面、第4位相は動機面ともいえよう。たしかに、これら4位相は時系列の観点からの配列でもあるのだが、われわれの日常行動では、この系列順をかならず踏んでいるわけではなく、意識的には第1・第2位相を経ずに第3位相を体験したり、第4位相の結果から改めて第1位相を意識することもあろう。しかし、実際の心理的経過としては、注目・意識化の位相を経ずに、自己評価をしようとしても評価対象である自己が成立していなければ不可能なのであり、直前の体験ではなくても、過去にかならず評価の対象になる自己の姿を認知的に形成しているものと思われる。

C 「自己カテゴリー化」における基本的心理過程

上述のように、「自己カテゴリー化」の4位相は、自己が自己として成立し、機能する過程としての「自己過程」の4位相と密接に関連していると思われるのだが、いずれの4位相とも現象面からの経過に着目したものであって、そこでの心理面への分析としては別の視点が必要と思われる。これも既述したことではあるが、ここでいう自己カテゴリー化は、基本的には対象次元を分類して抽出した特定のカテゴリーへと自己を帰属させ、自己と当該カテゴリーとを同定する心理・社会的過程であり、自己とそのカテゴリーとの関係の明瞭化の過程でもある。

これらの基本的過程が実現する過程において、自己カテゴリー化の4位相との関連で、中心的に機能する心理的過程が少なくとも3種類ほど識別されるのではないかと考える。

—a 認知機能を中心とした「情報処理過程（information processing processes）」

社会心理学におけるいわゆる「社会的認知」研究の動向については、Taylor, S.E.（1976）や Hamilton, D.I. et al.（1994）などを引用しながら、山本眞理子（1998）が強調しているように、1980年代を分岐点として認知的整合性研究から帰属理論研究を介して情報処理過程研究へと展開してきたようである。自己カテゴリー化過程においても認知的「情報処理過程」の問題が、特に、その「前段階やカテゴリー収集段階」を含む第1位相では中心的に機能しているように思われる。たとえば、情報の収集・記述・分類・構造化・解釈・適用・帰属・明瞭化などにおいて、情報相互の比較検討・スキーマ形成利用・ヒューリスティックやステレオタイプなどにおけるピースミール型処理対カテゴリー依存型処理など情報処理方式が深く関わってくると思われる。

—b 動機的機能を中心とした「意思決定過程（decision making processes）」

もちろん、意思決定を行うに際しては、諸般の情報処理を行う過程が必要なのではあるが、決定自体に焦点を置いてみれば、当然に、自らの信念体系、逆に、パースペクティブテイキングのように他者の視点の重視、決定に伴う危険度や利害得失の計算、集団的浅慮などのほかに、社会規範・社会的役割・所属集団の状況なども意思決定の方向に決定的な影響をもたらすのであろう。これらの諸機能の作用を中心に展開する「意思決定過程」は、自己カテゴリー化過程の「選択・決定過程」である第2位相では中心的働きをしているものと思われる。

—c 情動的機能を中心とした「感情処理過程（affect processing processes）」

上述の認知機能や欲求動機的機能においても、感情・情緒の機能の介在を無視できないのは言うまでもないことだが、とくに、われわれは自らの意思決定後にさまざまな感情を体験し、自らの言動を防衛したり修正したりすることでその感情の処理を行っているように思われる。決定に伴い派生する周辺との葛藤や融和、信念体系の確立や崩壊の危機、周辺からの称賛や受容・誹謗や排斥などは、自尊感情の高揚や動揺、羞恥心や恐怖心の消失や高まり、欲求充足感や欲求不満などを誘発するので、自己確認・自己防衛・自己改善などの言動によりこれらの感情の高まりを処理することになるであろう。自己カテゴリー化過程においては、「意思決定後の過程」にかかわる第3・4位相でこの種の「感情処理過程」が重要

な働きをしているのではなかろうか。

引用文献

Hamilton, D. L., Devine, P. G. & Ostrom, T. M. (1994). Social cognition and classic issues in social psychology. In P. G. Devine, D. L. Hamilton, & T. M. Ostrom, (Eds.) *Social cognition: Impact on social psychology*. Academic Press. Pp. 1–13.

中村陽吉 (1990).「自己過程」の4段階　中村陽吉 (編)『「自己過程」の社会心理学』東京大学出版会　Pp. 3–20.

中村陽吉 (2002). 対面場面の心理的過程—分類的観点からの接近—ブレーン出版

Tajfel, H. (Ed.) (1982). Social identity and intergroup relations. Cambridge University Press.

Taylor, S. E. (1976). Developing a cognitive social psychology. In J. S. Carroll & J. W. Payne (Eds.), Cognition and social behavior. Erlbaum, Pp. 69–77.

Turner, J. C. (1982). Towards a cognitive redefinition of the social group. In H. Tajfel (Ed.), 前掲書

Turner, J. C. (1987). *Rediscovering the social group*. Blackwell Publishers. 蘭千壽他訳 (1995) 社会集団の発見　誠信書房

山本眞理子 (1998). はじめに　山本眞理子・外山みどり (編)『社会的認知』誠信書房, pp. i –ix